

## 赤瀬美穂先生のご退職によせて

文学部長 西 欣也

赤瀬美穂先生は、2021年3月末をもって甲南大学文学部特任教授を定年退職なさいます。2011年に文学部に着任されてからのち、先生は10年間にわたって甲南大学における図書館教育の充実のために力を注いでくださいました。先生とご一緒に働く恩恵に浴することのできた私たち文学部教職員は、先生のものやわらかなご様子に印象づけられて「温厚篤実の人」としての赤瀬先生に親しみを覚えてきました。しかし先生の内には、穏やかさと並んで、高等教育における図書館学の使命をしっかりと見つめる気概があることをあらためて記憶にとどめたいと思います。

かつて先生がお書きになった文章に、一人のヨーロッパ人との印象的な出逢いが綴られています。山歩きの途中で偶然出くわしたそのドイツ人は、こちらのグループのリーダーが大学の図書館長を務めていることを知ると、尊敬の面持ちで「大学図書館長は学長職に相当する」と語ったといひます。「彼我の『大学』の歴史的な成り立ちの違いもあるだろうが、図書館に対する認識の重みを、その言葉や態度に感じた」という赤瀬先生のコメントからは、大学において図書館学講座を担う者としての矜持と、現状に甘んじることなく教育・研究環境を改善していこうとする深い覚悟が窺われます。

高邁な理念をお持ちである一方、先生のお仕事の中には、常に地に足のついた専門家の着実さと見識が感じられます。先生のご業績の中で繰り返し分析されているように、1980年代から今日に至る時期において、情報環境はまさしく「激変」しました。「OPACの検索実習でキーワードの入力ひとつにも四苦八苦した時代がうそのようである」と先生が回顧されたのもすでに2003年のことで、情報技術はその後も驚くべきスピードで進化を続けています。パソコンのみならずスマートフォンなどの機器が普及したことにより、個人レベルでの情報アクセスははるかに容易になりましたが、その反面、利用者が圧倒的な数の検索結果を処理できなかったり、インターネット上の情報を不適切に使用してしまったりといった問題は解消されていませ

ん。赤瀬先生は、そのように急変する情報環境に利点と危険の両面があることを早くから指摘され、利用者が入手した情報を比較し評価する能力を高めるような情報リテラシーの重要性を夙に強調されたのでした。

激変したのは情報テクノロジーだけではありません。日本における高等教育のあり方そのものが、ここ数十年で大きく変わりました。1991年以降、大学設置基準の綱領化を受けて情報教育は積極的に支援されるようになりましたが、同時に大学図書館は学生サービスの強化や厳しい緊縮財政を迫られるようになります。受験生や学生数の減少に伴って資料費や人件費が削減されるなか、赤瀬先生は、柔軟な工夫で図書館サービスを充実化する方法を模索し、有益な提言を重ねてこられました。

利用者の要求に応えられる図書館を追求する赤瀬先生のひたむきな姿勢を前にすると、心打たれる思いがします。私たち利用者は自分自身の力で文献資料を渉猟し研究業績をあげているかのように思いながちですが、信頼できる図書館へのアクセスがなければ、人文学の徒に何ほどのことができるでしょうか。もっとも、先生がしばしば強調される「ニーズ」や「サービス」といった言葉に感じられるのは、消費主義的な迎合とは別ものです。むしろ、利用者の「独立した人格」を尊重しながら教育や研究の個別的な求めに丁寧に応じていく謙虚な姿勢、すなわち本来の意味での「サービス」の推進に、先生の面目が窺われるように思います。

図書館司書を目指す学生の中には、赤瀬先生の研究室を訪れて先生に近づき親しもうとする者も多かったようです。そのように学生たちが先生に魅了されたのは、上に述べてきたように、専門家としての意識の高さと司書としての献身的な実践とが先生のお仕事の中で見事に融合合っているためではないかと思われまふ。しかも、先生の視野には常に、大学図書館だけではなく地域の公共図書館の役割が収められており、また、学生たちが大学在学中にとどまらず生涯にわたって情報活用能力を生かしていけるようにという長期的な心

遣いがともなっています。そうした稀有な配慮に敬意を表し、甲南大学の教育・研究に対する10年間のご貢

献に感謝申し上げるとともに、先生の今後のご健康とさらなるご活躍をお祈りいたします。